

8. 港区コミュニティのためのアート・プロジェクト

クリエイティブ・アート実行委員会
(東京都港区)

1. 活動の背景と目的

1. 背景

農村部の過疎化が叫ばれて久しいが、21世紀を迎えた今、都市もその例外ではない。東京オリンピックの開催、バブル経済の到来といった大きな転換期を経て、ここ東京都港区は商業化による住民の減少が続いている。古くからこの土地に根づき暮らしてきた住民が次々と離れていく中で、次第に地域住民同士のつながりは薄れ、町は本来の意味でのコミュニティを喪失しつつある。

私達クリエイティブ・アート実行委員会は、ここ十年間、障害のある人達とのアート活動も含め、様々な人々に、「創造的な表現活動の場とプログラム」を提供してきた。しかし今、表現活動の場に参加してもらうことを通して、個人の創造性を育むサポートをするだけでなく、このような活動を踏まえて、さらに新たな展開を図るべく、参加する人々の間に何らかのつながりを生みだし、新たなコミュニティの創造に貢献する『コミュニティ・アート活動』を展開することとなった。そこで、過疎化する港区におけるコミュニティの再構築のために「私と町の物語（旧称：港区コミュニティのためのアート・プロジェクト）」を立ち上げた次第である。

2. 目的

この活動は、アートという媒体を用いて、人々のつながりを生みだすことを目指し、そのことがやがて、港区コミュニティ再構築のきっかけとなることを願うものである。個人が何らかの表現方法を通して、自分を表現し、参加し、創り上げる表現活動が、グループ（コミュニティ）における一員としての認識、そしてグループ全体（コミュニティ）の新たなコミュニケーションを生みだしていく。

コミュニティの再構築は、既存のコミュニティを再認識し、そこからさらに現在の状況に相応しい新たなコミュニティを創出することが求められる。そのため、古くからの住民同士のつながりを改めて再認識してもらうこと、古くからの住民と新しく暮らし始めた住民とのつながりを生み出すこと、普段触れ合うことの少ない高齢者と青少年とのコミュニケーションを図ることなどを目的に、4つの活動（2つのワークショップ、展覧会、出版）を一連のプロジェクトとして展開する。

II. 活動の内容

1. 高齢者を対象にした「昔の港区の思い出を書く」ワークショップの開催



ワークショップ参加者が持参した昔の
写真（昭和36年）
〈港区一の橋付近の公園にて〉

1) 青山、赤坂、白金台地区の高齢者を対象としたワークショップの開催

各地域ごとに、在住あるいは以前在住であった高齢者の方々が、昔の地域の生活が写された写真を持ち寄り、写真にまつわる思い出を語り合い、分かち合う。その中で各自が印象に残る思い出について、自分自身の人生の物語を短い文章にまとめる。

ここには、場づくりのリーダーとして、アメリカで高齢者と青少年とのコミュニケーションを図りながら個人の物語を本としてつくる活動を展開しているロイス・サンリッチさんにご協力いただいた。この時集まった写真と文章をくみあわせ、一人ひとりの人生の物語をつづった個人アルバムを作成。

ワークショップには、当委員会スタッフの他、大学生が参加し、自分では文章にすることが困難な高齢者の方のために、聞き書きを行う場面もあった。

2) 訪問インタビュー形式による、「昔の港区の思い出」の収集

ワークショップ終了後、様々な理由でワークショップに参加できなかった高齢者の方々をひとりひとり訪ね、インタビューを行い、各自の写真と思い出を個人アルバムにまとめる。

インタビューには、ワークショップ同様、大学生が引き続き参加しているが、さらに多くの学生にも加わってもらおうと、現在、古くから港区白金に校舎を持つ明治学院大学にご協力いただき、大学生の参加を呼びかけている。また、区内に在住・通学する高校生にも参加を呼びかけている。こういったインタビューを通して、普段触れ合うことの少ない高齢者と青少年のコミュニケーションの機会を増やし、誰もが参加できるシステムをつくっていく。



「昔の港区の思い出を書く」
ワークショップの様子

2. 中高生を対象に「今、居る場所を再発見する写真ワークショップ」を開催

港区内の中・高校生学生を対象に、今、自分たちのいる「場」を写真に撮るワークショップを開催した。

今、自分はどんな時代に生き、どんな場所に生きているのか、何に興味を持ち、なぜそれを写真に撮りたいのか、ワークショップの中で、写真を撮る原点を考え、実際に写真を撮る体験をしてもらう。この活動における場づくりのリーダーとして、写真家の橋口譲二氏にご協力いただく。

撮った写真には、彼ら自身にこの体験を通して感じた思いを文章として添え、ひとつの作品にまとめる。

3. 1と2のワークショップから生まれた作品を集めた展覧会の開催

2つのワークショップ等から生まれた作品を集め、港区のみならず、より多くの人にみてもらうため、展覧会を開催。また展覧会の期間中、このような活動の持っている意味について、ディスカッションやトークを開催する。

◇展覧会

- 展示作品①高齢者による昔の港区の写真と思い出
②青少年による今の港区の写真と港区への思い
③海外の中高生による写真「自分のいる場所」

◇ディスカッション

- ・タイトル：「アートは地域を再創造するか？（仮題）」
- ・内容：地域住民に参加してもらう地域密着型のアート・プロジェクトの持つ意味について討議する。
- ・パネリスト：プロジェクト参加者、長田謙一（千葉大学芸術学教授）橋口譲二 他



ワークショップの様子

4. 各作品及び、プロジェクトの一連の活動をまとめた本の作成、出版

本の内容・展覧会に出品された作品

- ・ディスカッションの記録
- ・一連の活動記録

III. 活動の効果と今後の課題

1. 活動の効果

都市のコミュニティが崩壊していくなかで、人々がその土地の思い出を語ることも少なくなりました。高齢者の方々と活動を続ける中で、皆さんが口を揃えて言うことは、昔の思い出を残しておきたい気持ちは大いにあるが、実際にきちんと人に話すことは少ないということだった。だからこそ、参加してくださった高齢者の方々は、いきいきと真剣に思い出を語って下さり、また聞く側も非常に真摯な姿勢で聞くことが出来た。このようにお互いが真摯に向かい合う場に参加した人々には、以前にはない「つながり」が生まれ始めている。

記憶を確認するために、久しく連絡をとっていなかった昔の友人に連絡をとり旧交を暖めたり、近くに住んでいながら、お互いに出会うことがなかった人々のつき合いが始まったり、参加した学生が道端で出会う高齢者の方とあいさつを交わしはじめなど、身近なところで、近隣の人々とのつき合いが生まれてきた。また、参加してくださった方々からも、「自らの人生を振り返る時間が持てた」「自分がこの地域に属し、コミュニティをつくっている一員なのだということを再認識した」「自分たちの世代の物語を、若い世代が聞いてくれることに感謝する」といった感想が多く聞かれた。



参加者が持参した昔の写真

今回はまだプロジェクトが立ち上がり、それ程時間的に経過していないので、知り合った住民同士が自主的に新たな活動を始めるまでは至っていないが、新しいコミュニティが生まれてくるひとつのきっかけになったことと思う。

2. 今後の課題

今後この活動は、今回の3地域（青山・赤坂・白金台）からさらに活動範囲を広げ、より多くの住民の方々に参加を呼びかけたいと考えている。人と人とのつながりを生み出すこういった活動は、継続し長い時間をかけ育てていくことで、初めて様々な効果がゆっくりと現れ、新たなコミュニティづくりにつながっていく。そのため、

①活動を継続させていくための運営資金の獲得が最重要課題である。

さらに、

②写真や文章といった表現手段以外にも、演劇やビデオ・アートなど様々な表現手段を用いたコミュニティ・ベースの活動へと発展させていく可能性についても、模索したい。

また今回の反省点として、こういった活動が過去にない新しいものであったため、なかなか人々に理解していただけないという難しさがあった。このことを踏まえ、今後は、

③この活動の趣旨や意義を、地域住民に、または関わる人々全てに、もっと広く周知していく必要がある。

アートを通した地域活動という新しい活動に対する理解を得ていくことは、決して容易ではないが、より多くの人々に参加していただくためにも、また、継続資金を得ていくためにも、非常に重要な作業である。周知に力をいれ、さらなる活動の広がり努めたい。